

# KN グローカルリサーチレポート

2019年7月  
No.39

梅雨の晴れ間、夏の太陽で気温が上がります。今年も暑くなりそうです。

## 今夏も熱中症に注意！

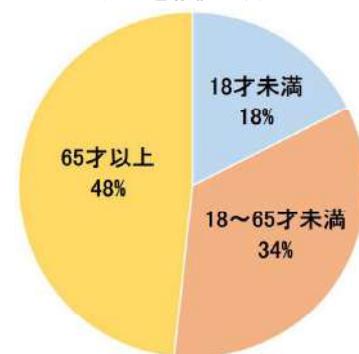
表1は、浜松市の救急自動車による熱中症搬送の状況である。昨年度は例年の倍以上の734件の搬送があった。また、搬送数は、真夏の8月より

表1 救急自動車による熱中症搬送状況 (人)

	5月	6月	7月	8月	9月	合計
H30	17	38	381	264	34	734
H29	6	18	146	103	5	278
H28	10	19	90	97	25	241
H27	12	10	129	115	9	275

浜松市消防局の資料より作成

図1 同左の年齢別の状況 (H30速報値より)



7月の方が多い傾向がある。年齢別では、65才以上の高齢者が約半数を占める。

これからの夏、涼しい環境作りやこまめな水分補給と十分な休息で、熱中症を防ぎたい。

浜松市では、気温が上昇し熱中症の危険が高まると、注意喚起のメールを一斉配信する「防災ホットメール」がある。登録は右記のQRコードから。



## 浜松市児童相談所 相談件数は増加

先月19日、児童虐待防止法と児童福祉法の改正案が国会で可決・成立した。親の子どもへの体罰が禁止されるとともに、児童相談所の体制が強化される。

静岡県によると、2018年度に県内の児童相談所が対応した児童虐待の相談件数は2,911件(前年度比543件増)で過去最高だった。児童虐待の事件が相次ぎ社会的関心が高まった事や、児童相談所と警察、学校などの情報共有が進み、警察を経由する相談が増えたためとみられる。

### 【障害相談が最多】

浜松市児童相談所の、2018年度の相談件数は2,534件で、前年度より215件増加した。相談内容は、「障害相談」が1,662件(全体の65.6%)と最も多く、「虐待」が575件(同22.7%)、「養育困難などの相談」が151件(同6.0%)となっている。

### 【虐待の相談は過去最多】

浜松市でも2018年度の虐待件数は575件と、前年度より101件増加し、過去最高となった。

表2 虐待相談件数

	H25	H26	H27	H28	H29	H30
浜松市	361	437	384	494	474	575
静岡県	1,725	2,132	2,205	2,496	2,368	2,911
全国	73,802	88,931	103,260	122,575	133,778	集計中

浜松市児童相談所の資料より

## アクティブラーニング ～米国HighScope幼児教育カリキュラム 視察記～ (No.3)

### 【「ペリー幼児教育計画」と「HighScope 教育財団」】

今から約50年前の1962年、アメリカ・デトロイト郊外イプサランティの特殊教育部長をしていた教育学者・心理学者のデビット・ワイカート氏は、小学校に通う子どもたちの間に、貧困家庭から来る子どもたちと、そうでない子どもたちの学力の差が大きいことに気付いた。そこで、貧困家庭の子どもたちが多く通うペリー小学校の黒人校長のユージン・ピアティー氏とともに、子どもたちが小学校に入る前に、その学力の差を縮めたいとの思いで、ペリー小学校にペリープレスクール（幼稚園）を開設した。

彼らはここで、アフリカ系アメリカ人の3歳から5歳の小学校に入る前の子どもたち123人を、ペリー幼稚園に通うグループと通わないグループに分けて、通うグループには幼児教育プログラムを実施し、5年間データを取り、さらにその後、子どもたちがどのように成長していくか追跡調査をする事にした。これをペリー幼児教育計画（Perry Preschool Project）と言う。

この追跡調査は、この子どもたちが50代になった現在も続いており、先月（2019年5月）、その調査結果が発表された（結果の詳細は次号で）。

1970年、このペリープレスクールで培われたノウハウを後世に伝えようと、デビット・ワイカート氏によって設立されたのがHighScope 教育財団（HighScope Educational Research Foundation）である。HighScope では、1960年代に実施された幼児教育プログラムを改良しながら、半世紀にわたり提供し続けている。（次号に続く）

虐待の通告経路は、「警察」が最も多く 159 件（全体の 27.6 %）、次いで「近隣・知人」が 156 件（同 27.1 %）、「福祉事務所」が 62 件（同 10.7 %）、「家族・親戚」が 58 件（同 10.0 %）、「学校」が 52 件（9.0 %）等となっている。

虐待の種別は、「心理的虐待」が最も多く 235 件（全体の 40.9 %）、次いで「身体的虐待」が 198 件（同 34.4 %）、「ネグレクト」が 119 件（同 20.7 %）となっている。

被虐待児の年齢別状況は、「小学生」が最も多く 226 件（全体の 39.3 %）、「3 才から学齢前」が 145 件（同 25.2 %）、「0 歳～3 歳未満」が 113 件（同 19.7 %）となっている。

主な虐待者は、「実母」が 323 件（全体の 56.2 %）、「実夫」が 185 件（同 32.2 %）となっている。

以上の統計から、乳幼児期から小学生の子どもを持つ「親への教育（子どもの発育や発達について医学的かつ脳科学的な見地からの知識を得られる教育等）」が重要と考えられる。

### 【虐待は子どもの脳を変形させる】

また、最近の研究から、子どもへの虐待により脳が物理的に変化し、その後の子どもの発達に悪影響を与えることがわかっている。例えば、子どもの頃に体罰を受けた人は学習や記憶と関わる脳の領域が萎縮したり、暴言を浴びせられた子は聴覚に関わる側頭葉の領域が大きくなったり、親同士の暴力を長期間見せられた子は視覚に関わる領域が変化することがわかっている（詳細は、福井大学・子どものこころの発達研究センター友田明美教授などの文献をご覧ください）。



執筆 = 西川公一郎：元浜松市議会議員、防災士  
(公社)子どもの発達科学研究所 事務局長

浜松市中区 在住 ko-ichi@24kawa.org